

「うわあああああっ——!!」

まばらな木々の合間を縫って射し込んだ陽光が、柔らかく草木を照らす穏やかな夕暮れの森。その牧歌的な風景には酷く不釣り合いな叫び声が、辺り一面に響き渡る。

がさがたと枝木を踏み折る大きな音を立てながら、前を必死に掻き分けるようにして、鬱蒼とした茂みから年端も行かぬ少年が転び出る。その顔は恐怖と焦燥に引き攣っており、激しく上下を繰り返す肩が、その息苦しきのほどを雄弁に物語っていた。

「もっ、もっと遠くに、逃げない、とっ……!!」

頼れそうになる身体と心に鞭を打ち、なおも懸命に前に進もうと立ち上がりかけた少年の無防備な背に、鈍く重い衝撃が走り、再び地面に叩きつけられる。地べたに頬を擦りつけながら何とか顔だけを持ち上げると、痛みと苦しさに滲む視界の先に、昆虫と犬を掛け合わせたような姿をした異形の生物が、ギョルギョルと不快な異音と共に小刻みに揺れながら佇んでいた。

「い、やだ……。こんな、ところで、何の訳も、分からないまま、死にたく、ない……！」

弱った獲物を前にして舌なめずりをするかのように、少年から少し離れた場所でうろつく未知の獣。粘ついた唾液を垂らしながら歪な鋭い牙を剥き出しにし、低く不快な唸り声を上げている。

もう一度、距離を取ろうと少年は必死に身を振らせてもがくが、身体にまったく力が入らない。ままならない悔しさと、突然の理不尽に為す術もなく押し潰されようとしている悲しみから、いよいよ堪えきれなくなった涙が少年の頬を伝い落ち、乾いた地面に小さな染みを散らす。

（何で……。こんな目に……。さっきまで、家の近くを歩いていたはず、なのに……！）

前足を地に伏せて、腰を高く突き出すようにして背を弓なりにしならせ、いよいよ今にも飛び掛かろうとしている異形の様子をどこか他人事のように傍観しながら、少年は、平穩を絵に描いたような日常を失った瞬間のことを思い返していた。

キーンコーンカーンコーン——。

どことなく気の抜けたような鐘の音色が、古ぼけた校舎の中を反響し、何重にも重なり合いながら響き渡る。もはや何度耳にしたかも分からないほどに聞き飽きたその音色も、今日ばかりは、聞くものの心を酷く躍らせるものだった。

「――まあ、何だ。夏休みだからと言って、あまり羽目を外しすぎないようにな」

古めかしい教壇に立つ担任の教師が、さっさと話を終わらせてくれ、という突き刺すような無言の圧力に負けたと言わんばかりに、話を途中で切り上げる。こんな時ばかり威勢の良い返事を返す生徒たちは、皆一様に長期休暇を目前にして期待と興奮をまったく隠しきれておらず、教室全体が浮ついた空気に満ちていた。

毎年の事ながら見慣れたその光景に、思わず教師の口から呆れ混じりの苦笑がこぼれると、生徒たちが待ち望んでやまなかった言葉がようやく投げかけられる。

「それじゃあ、良い夏を。皆、浮かれてないで気をつけて帰れよ」

その言葉を合図に、座っていた生徒たちがガタガタと机を揺らしながら弾かれた様に立ち上がると、一気に教室が活気に満ちた喧噪で溢れかえった。

「っしゃ、おらあ！ようやく夏休み突入う!! 一分一秒を無駄にせず、全力で遊び尽くすことをここに誓います!!」

騒々しい教室の中でも際立ったやかましさを見せる少年が、有頂天な様子で高々と宣言する。

高揚感に任せるままに雄叫び染みた妄言を撒き散らしていた少年だったが、ふと何かを思い出したかのように忙しく周囲を見回し始めたのも束の間、すぐに獲物を見つけた獣よろしく一目散に駆け出した。

「おい、メグ！何一人でのほほんとしてやがる！その歳でもう枯れたのか!？」

駆け寄った先で帰り支度を整えていたメグと呼ばれる少年――妹尾メグムの背中に、遠慮のない平手打ちが豪快な音を立て炸裂する。

「――いったあ!! 俺が枯れてるんじゃないくて、勝吾が生い茂りすぎなんだよっ！」

まったく無防備の背中に通り魔的な一撃を喰らわされたメグムは、痛みで涙目になりながら振り向くと、無邪気に笑い声を上げてはしゃぐ“下手人”に食って掛かる。

しかし、被害者の訴えなどまったく気にするそぶりも見せず、勝吾はさらに畳みかけるようにしてメグムに捲し立てる。

「っかーっ、お褒めの言葉、誠にセンキュー！ それじゃ、リクエストにお応えして、今日は景気付けにパーッとメシ食って帰るとするか！」

「断じて褒めてもいなければ、そんなリクエストも提出した覚えもございませんので、本日はお引き取り願えますでしょうか？」

「ああ、悪かったって！——俺が、お前とメシ食いに行きてえんだよ！謝るから、付き合ってくれってば！」

わざと不機嫌な態度で冷たくあしらってやると、途端に慌てて下手に出始める勝吾。と言っても、大して悪びれた様子はなく、「頼みますよ、メグムさあん」などと、奇妙に身体をくねらせながら、わざとらしく媚びた声で安っぽいご機嫌取りに走る始末だ。

かく言うメグムもふざけて怒っている振りをしてただけだったので、目の前で繰り広げられる友人の滑稽な姿に堪えきれず吹き出すと、すっかり機嫌を直した面持ちで謝罪に応じる。

「今日は、いつにも増して絶好調だね、勝吾。いいよ、何食べに行こっか？」

「さっすが俺のメグムちゃん！愛してるぜっ!!」

狙い通り相手から色好い返事を引き出したことに気を良くした勝吾は、勢いに任せてメグムに抱き着く。

標準的な成人男性と比べて二回りも三回りも大柄で筋骨隆々とした勝吾の体躯に、同年代と比してもなお明らかに小柄なメグムの体躯は、すっぽりと覆い隠されてしまう。

「っだあ！だから勝吾は、いちいち抱き着くなってるの!!」

「まあ、そう恥ずかしがるなって！俺とお前の仲だろ？」

「少なくとも、熊みたいな大男と抱き合うような仲になった覚えもなければ、むさくらしい髭面に頬擦りされて喜ぶような趣味もないよ！」

「ほっほっほっ、素直じゃないのお、愛い奴め！」

ふと、自分たちのはしゃいでいる場所が、放課後の教室のど真ん中だということをメグムは思い出す。冷静になった頭に気恥ずかしさが一気に湧き上がり、自分に覆い被さる友人への抵抗の手を強める傍らで、級友たちの様子を横目でこっそりと窺い見る。

手を叩いて笑う者や半ば呆れた様子で肩をすくめる者もあれば、生暖かい視線を送る者に、異様に興奮した様子で熱い眼差しを二人に注ぐ者もあり、実に様々だったが、嫌悪や敵意を感じさせる姿は全くと言っていいほど見当たらない。

（これも勝吾の人徳って奴、だよなあ……。 “抱き着き癖” だけはちょっと頂けないけど、気の良い奴だし、今思い返しても勝吾と仲良くなれたのは幸運だったよなあ）

メグムが勝吾と知り合ったのは、高校の入学式でのことだった。

その日、桜の薫るような陽気に包まれた体育館では、新入生たちがクラス毎に分かれて立ち並び、晴れの舞台に気合を空回らせる校長の“ありがたいお話”を、右から左へと聞き流すことに全身全霊を傾けていた。

当然、メグムの耳にも校長の声など届いていなかったのだが、その他大勢とは異なり、退屈を持って余して無我の境地に至ったことが原因ではなく、自分の目の前に聳え立つ大男

の存在に気を取られていたからだった。

(で、デカすぎじゃない……!? 同じ人種として、同じだけの時を刻んできた生物だとは信じ難い……。)

数百名が立ち並ぶ体育館の中でも、文字通り“頭一つ”、どころか“頭一つ半”も抜けて背が高ただけでも驚異的なのに、制服の上からでも分かる逞しい肉体は横にも広い。真後ろに立つ小柄なメグムの視界には、大男の背中以外の景色が映る余地などなかった。

そんな巨躯の男は、入学式が始まるや否や器用にも直立しながら眠っていたのだが、いよいよ睡眠が深くなってきたのか、徐々に船を漕ぎ始める。目の前で不規則に揺れる壁のような巨体が、もし倒れ込んでくれば、男子中学生の平均身長さえも大きく下回るメグムなど、ひとたまりもないだろう。

(絶対、先生たちにも気付かれているだろうなあ、この人。っていうか、本当に立ちながら眠る人なんて、初めて見たよ……。)

呆れ半分、感心半分で目の前で揺れる“大木”を眺めていると、見る見る間にぐらつき具合が大きくなり始める。

(ちょっ、ちょっと……。これ、大丈夫……。？ こっちに倒れて来たりしない、よね……。!?)

容易に想像できたはずの事態とは言え、いざ実際に目の当たりにすると予想以上に焦らされてしまう。忙し気に脳内で右往左往していると、やおら目と鼻の先で揺れる背中がひと際大きく後ろに傾ぎ、咄嗟にメグムは支えようと手を伸ばした。

しかし、すんでのところ目覚めた大男は、反射的に足を後ろに大きく開き、バランスの崩れた身体を支えようとしたらしいのだが、ちょうど前に踏み出されたメグムの足が膝裏にぶつかり、所謂“膝カクン”を完璧な形でお見舞いされる格好となってしまう。

「——うおおっ!？」

「うえっ!?!——ひょわあっ!!」

完全に想定外の展開に為す術もなく、背中から地面に崩れ落ちる大男。勢い付いて繰り出した足を不意に払われ、大きく体勢を崩されてしまっていたメグムに、眼前に迫り来る巨体を避けられるはずもなく、二人は互いに素っ頓狂な悲鳴を短く上げると、もつれ合うようにしながら盛大に地面に倒れ込んでしまう。

あくまで表面上とは言え、誰もが諸先生方の垂れ流す退屈極まりないご高説に傾聴している状況にあって、場違いに響き渡った騒音は、周囲の見知らぬ同級生はもちろん、ちょうど壇上から熱弁を揮って悦に入っていた年嵩の教師の視線と意識を惹き付けるには、十分過ぎるものだった。

「……えー、どうやら早速、若さを持って余している人たちがいるようですが、君たちには、是非その有り余る元気を勉学の場でこそ発揮してもらいたいものですね」

壇上の教師が乾いた笑い交じりにこぼした苦言が体育館に響き渡るが、その声色にはあからさまな呆れの色が滲んでおり、騒音の元凶となったメグムたちに、周囲からの奇異の目が集まる。

「あつつつつ……」

「っあ、ご、ごめん……！」

転倒の衝撃から立ち直った瞬間、周りから無数の視線が注がれている状況に自分が晒されていることに気が付いたメグムは、傍らで尻餅をついていた大男に慌てて小声で謝るとすぐさま立ち上がり、逃げ帰るようにして自分の立ち位置に戻ると、思いがけず悪目立ちしてしまった気恥ずかしさを堪えるように、視線を床に釘付けにしたまま直立する。

そんなメグムの様子を見て、ここで声を掛けても余計に居た堪れない思いをさせるだけだと思ったのか、のそりと立ち上がった大男はわずかに逡巡した様子を見せると、そのままメグムに声を掛けることなく再び前に向き直り、教師からの有難いお言葉を聞き流す作業に戻るのだった。

そうして二人がそれぞれの方法で残りの時間をやり過ごしていると、やがて入学式の閉会を告げる教師の声が、二人の耳に届く。すかさず各クラスの担任と思しき教師たちが、慣れない環境の中で何十分間も立ちっぱなしを強いられていた生徒たちの先導を始めると、遠慮がちに広がるざわめきを引き連れながら生徒たちが移動を開始した。

何とか急場を凌いだことにメグムが胸をほっと撫で下ろしていると、突然、頭上から声が投げかけられる。

「ええと、さっきはすまなかったな。怪我とか、しなかったか？」

反射的に声のした方向に顔を向けると、後頭部を撫でるように手を当てた大男が、ちょ

っとだけばつの悪そうな顔をしている姿が目に入った。

「い、いや。僕の方こそ、さっきはごめん。うん、特に怪我とかはしてないよ、ありがとう。……君の方こそ、大丈夫だった？」

ちょうど気を抜いたタイミングで話しかけられ、一瞬だけ面食らった格好となったものの、山のような凶体をした大男が申し訳なさそうに背中を丸めている姿がどうにも面白く映り、メグムは思わず笑みを零しながら謝罪に応じる。

すると突然、目の前の男が呆けたようにも驚きで硬直したようにも見える顔をして自分の方を見つめたまま、うんともすんとも言わなくなってしまい、その僅かな沈黙に耐えかねたメグムは、内心の焦りを抑えながら気まずげに言葉を重ねた。

「えっと……。やっぱり、あんまし大丈夫じゃ、なかった感じ？」

「あっ、いや、すまん！ちょっと目を奪われていただけだ！大丈夫だ、俺はまったく何ともない！」

「そ、そう。それなら良かったよ。でも、目を奪われていたって……。何に？」

「あー、まあ、それはさておきとして、自己紹介させてくれ。俺は、熊谷勝吾(くまがいしょうご)熊谷勝吾。出身は、東二中(ヒガニ)東二中だ。これも何かの縁っつーことで、これからよろしく頼むぜ」

「あ、お隣さんだったんだね。僕は、東一中(ヒガイチ)東一中から来た妹尾(せのお)妹尾メグム。こちらこそよろしく、熊谷君」

「よせよせ、“熊谷君”だなんて柄じゃねえっての。普通に下の名前で呼んでくれていいぜ。俺もそうさせてもらうからよ」

「そっか。それじゃ、そうさせてもらおうかな。——改めてよろしくね、勝吾」

「おうっ、確かによろしくされたぜ、メグム。……単なる直感だけど、何だかお前とは仲良くやっていけそうな気がするぜ」

「奇遇だね。何となくだけど僕も、そんな気がする」

そうして、どちらともなく差し出された手を取り、握手を交わしながら穏やかに笑い合う二人。いつしかクラスメイトたちも担任らしき人物に先導されながら移動を開始しており、二人は教室に辿り着くまでの間、春の麗らかな日差しの下で談笑に花を咲かせるのだった。

——などという絵に描いたような青春的一幕で閉じられるほど人生は甘くはない。体育館を出た直後、「学年主任」を名乗る厳めしい面構えをした壮年の教師に背後から呼び止められた二人は、式中の不作法について、年季を感じる職人芸のような説教を喰らう羽目となるのだった。

——そんな間の抜けた出会いから、既に丸一年以上もの時が過ぎていた。二人は進級後

も同じクラスに振り分けられることとなったのだが、気付いた時には学内屈指の“凸凹コンビ”として名を馳せることとなっていた。

知らぬ間に“凸凹コンビの凹”なる不名誉な称号をメグムが授かることになったのも、何食わぬ顔で“凸”担当に就任していた勝吾の存在によるところが大きい。

と言うのも、体育会系全開のノリと一見がさつな言動のせいで誤解されがちだが、実際のところ、勝吾は校内でも一二を争う「文武両道」を地で行く男だったりしている。

入部して以来、柔道部の絶対的エースとして君臨し続けており、昨年の全国大会では、並み居る上級生たちを片っ端から薙ぎ倒し、一年生の身でありながら見事に準優勝を果たしているほどだ。さらに、朝から晩まで稽古漬けの日々を送っているにもかかわらず、常に学年でも上位に入る成績を維持しているのだから、世の凡人たちはたまったものではない。

しかも、“汗臭いイメージの付き纏う部活ランキング”があれば、常に優勝候補の筆頭に挙げられること請け合いの柔道部に所属している上に、百九十センチメートルを越す長身と筋肉に覆われた分厚い肉体、男臭い顔立ちに短く刈り上げられたスポーツ刈り、極めつけには顎からもみあげまで繋がった髭面——という“思春期の女子に倦厭されがちな要素”を人の形に落とし込んだような男だということにもかかわらず、当の女子人気は驚くほどに高いというのだから、何とも世の道理に反したような存在だと言える。

もはや妬みや嫉みの対象とならない方がおかしい位だったが、明け透けで人好きのする快活な性格と、面倒見の良い兄貴分的な気質のおかげもあってか、学内の男子からも総じて広く慕われており、当然のように教師たちからの信頼も厚かった。

「あぁっ、もう！いい加減、離れろってば!!」

「なんだよ、つれねえなあ。俺とお前の仲じゃねえか」

「だからっ！白昼堂々、しかも公共の場でっ、こういうことをするな、つつーの!!」

「あぁん、メグム君ってば、いけずう……!!」

抵抗空しく尚も覆い被さり続ける巨体から抜け出そうと、メグムが全力で暴れたところでようやく満足したのか、わざとらしい猫撫で声で非難の声を上げると、勝吾は腕の中に納まる小柄な友人を解放した。

顔を真っ赤にして肩で息をする自分とは対照的に、汗一つかかず涼しい顔で笑う目の友人を悔し気に睨んでいたメグムは、ふと生暖かい視線が肌に刺さるのを感じ慌てて周囲に目を遣ると、通りすがりの同級生たちまでもが足を止め、どこか慈愛に満ちたような微笑みを浮かべながら、妙に優しげな眼差しを自分たちに注いでいた。

「……………うわっ！」

「んあ？いきなりどうしたってんだ？」

「な、何でもないよ。それより、行くならさっさと行こうよ！」

「おっ、急に乗り気になりやがったな？よっしゃ、それじゃ出発すっか！」

居た堪れない視線と空気から一刻も早く逃れたい一心で、その場から可及的速やかに立

ち去らんとしてメグムは勝吾を追い立てたのだが、そもそも周囲の状況に気付いていないのか、あるいは気が付いた上で何も気にしていないのか、勝吾はからからと笑いながらメグムの肩を抱き寄せると、校舎から脱出するべく行動を開始した。

肩を掴む手を引き剥がそうと密かに試みるも、まるでそこにあるのが当然だと言わんばかりに微動だにしない。ますます突き刺さる好奇の視線にメグムは諦め混じりのため息を一つ吐くと、自分よりもずっと広い歩幅を刻む友人に置いて行かれないよう、足並みを揃えることだけに意識を集中するのだった。

「いやあ、食った食ったあ！流石の俺でも満腹すぎて、もうデザートかスイーツくらいしか入んねえわ」

「……『満腹』という言葉の定義を根幹から揺るがさないでいただけます？」

結局、勝吾の強い主張に押される形で、学校の近くに店を構える個人経営の食堂に行くことになったのだが、彼のお目当ては、その店の名物である大食いチャレンジにあった。『二十分以内に大盛りカツカレー五人前を完食できたら無料』というオーソドックスな条件設定ではあるものの、そもそも一人前の分量がかなり多いこともあって、挑戦者の数の割にほとんど成功者が出ていないことで知られている。

その“難関”を突破せずに夏休みを満喫することなどはできない、と力説する勝吾の瞳は、食欲と闘争心で燃え上がっていた。

「……それにしても、今日は一段と凄まじかったね。まさか大食いチャレンジ中に、『おかわり』をする人間の姿を見られる日が来るとは思わなかったよ」

「はっはっはっ！この俺にかかれば、カツカレー計十人前なぞ朝飯前のスムージーを飲み干すより容易きことというものよ！」

「あその店長さん、途中から泣き出しそうな顔してたもんなあ。今日ので味を占めてお店に通い詰めたりするのは、流石に気の毒だから止めて差し上げなよ？」

「“武士の情け”っつー奴か……。そうだな、週イチくらいで我慢しておくことにするか」

「……いっそひと思いに殺してやりなよ、もう」

情け深い武士どころか、“生かさず殺さず”を体現する悪辣な大名のようなことを宣^{のたま}う悪友の膨れた腹を、いつもの意趣返しのつもりで強めに何度か小突いてやる。限界まで食べた直後ならば、流石に多少のダメージは入るだろうと踏んでの凶行だったのだが、当の小突かれた本人は微塵も苦しむ様子を見せていないどころか、何故だかちょっと嬉しそうにも見えるにやけ面をしていた。

「じゃれつく子猫から猫ばんち食らったような気分っつーの？何か、すげえ和んだわ……」

「割と手加減なしの一撃だったのに、猫ばんち、だと……。この、人の皮を被った熊め……！」

「はっはっは、俺の鍛え抜かれた“毛皮”は堪能してもらえたかね！物足りなければ、も

っと好きにしてくれてかまわんよ！」

「子猫の爪だって、諦めなければ分厚い毛皮だって切り裂くことができるってことを証明してみせる——！」

「ふははは、その意気やよし！存分に掛かってくるがよいわ!!」

食堂からの帰り道、長期休暇に入った高揚感も手伝ってか、二人はいつにも増して羽目を外してはしゃぎ合う。そうしてしばらくじゃれ合いながら帰路を進んでいると、ふとくぐもった機械的で甲高い旋律がどこからともなく鳴り響いたかと思った瞬間、メグムはズボンのポケットの内側が小刻みに振動していることに気が付いた。

「あれ、母さんから電話だ。勝吾、ちょっとごめん」

ポケットから取り出したスマートフォンの画面には、母親からの着信を示す文字が躍っていた。この時間はまだ仕事のはずだが、何かあったのだろうか。不審に思いながらも、会話を途中で遮ってしまったことを友人に詫びると、画面上に光る応答の文字に手早く触れる。

「もしもし、母さん？」

「あ、メグム？いまちょっと大丈夫かしら？」

「いま家に帰る途中だから問題ないよ。何かあったの？」

「あら、丁度良かったわ。実はちょっと今日、仕事で帰りが遅くなりそうなのよ。悪いんだけど、今日の晩御飯の準備お願いしたいんだけど……」

「何だ、そんなことか。こんな時間にわざわざ電話を掛けてくるから何事かと思っちゃったよ。うん、いいよ。晩御飯の準備は任せて」

「ありがとう、助かるわ。あ、ついでと言っただけ、おつかいも頼んじゃっていかしら？」

「ちゃっかりしてるね。いいよ、何を買ってくればいいの？あと、お駄賃に期待してもいいの？」

「ったく、どっちがちゃっかりしてるのよ。分かったわよ、特別にお駄賃もあげちゃうから買い物よろしくね。買ってきてほしいものは、今からメールで送るから」

「交渉成立だね。何か食べたいものとかある？」

「んー、ちょっと思いつかないわ。メグムの作るご飯は何でも美味しいから、お任せするわ」

「了解。ご期待に添えるよう頑張るよ」

「ふふふ、楽しみにしてるわ」

——それじゃ、仕事頑張ってね、と母親への労いの言葉とともに通話を終わると、横で会話を聞いていただろう勝吾が、感心した様子でメグムに話し掛けてきた。その面持ちにも声色にも、珍しく揶揄いや冗談の色は見られない。

「相変わらず、おばさんと仲良いな」

「んー、そう？」

「いや、冗談抜きでメグは偉いと思うぜ。忙しいおばさんの代わりに、しょっちゅう家事炊事もこなしてるんだからさ」

「……ま、唯一の肉親だしね。それに、もう中学生の時に反抗期も終えちゃった訳だし、大変な時にはお互いに助け合いましょう、ってだけだよ」

「やっぱ、立派だよ。俺も頭では分かってるつもりなんだけど、つい親に甘えちまうし、つい生意気な態度も取っちゃう。……メグを見てると、自分がまだまだガキだなんて思わされるぜ」

「買い被りすぎだっけの。僕の場合は、ただ時間に余裕があるだけだよ。勝吾みたいに朝から晩まで部活と勉強漬けの毎日を送っていたら、僕だって無理だよ。それに、僕からしたら、勝吾の方がずっと……」

「ずっと？……おい、何だよ。途中で止めんなよ」

「何か素直に褒めるのも、ちょっと悔しいし、っていうか何かこっ恥ずかしくなったからノーコメントで。——でも、まあ。勝吾のことをすごいと思っているのは、本当だよ」

「何でえ、生殺しかよ！くそう、俺は諦めねえからな！」

何とかしまい込まれた言葉の続きを引っ張り出してやろうと足掻く勝吾からの追及を躲しているうちに、目的地がすぐそばに迫っていた。普段はもう少し先まで帰り道は一緒になるのだが、今日は頼まれたおつかいがある。鼻^{ひいき}眞のスーパーマーケットに寄って帰るためには、ここで勝吾とは別れなくてはならない。

「あ、勝吾。今日はスーパーに寄って帰りたいから、悪いけど今日はここまでだね」

「てめっ、逃がさねえぞ。俺も買い物についてってやる——って思ったが、あんまり家庭の手伝いするメグを邪魔するのも悪いしな。その親孝行ぶりに免じて、今日のところは見逃してやるぜ」

「三流悪役の捨て台詞かっての」

「まあ、また後で連絡するからよ。今年の夏も、予定合わせて色々遊びにいこうぜ」

「おっけー。とりあえず海でBBQとキャンプは必須の方向でよろしくて？」

「そいつぁ愚問つつもんだぜ、相棒。定番にして王道の夏イベントを回避する選択肢は、この熊谷勝吾の攻略チャートには存在しないのだよ！」

「流石だね、相棒。準備は僕もばっちり手伝うからさ、段取りの方は任せたよ」

「おう、任せとけ！」

無駄に発達した大胸筋を軽く拳で小突きながら悪友を焚き付けると、我が意を得たりとばかりに得意げに哄笑する勝吾。傍目にも上機嫌な様子で遠ざかっていく友人の背中を苦笑しながら見送ると、メグも母親から指令を済ませるべく踵を返した。

「はああ、重たっ。まさか、徒歩の人間にお米まで買ってこさせようとは……！あの人

の皮を被ったちゃっかりの権化め……!!」

店の名前が刻印された安っぽいデザインのビニール袋を左右それぞれの腕にぶら提げ、両手で米袋を抱きかかえるようにしながら、メグムはスーパーを後にした。自動ドアが開いた瞬間、良く冷えた店内の空気を押し潰すような重く湿った不快な熱気が無遠慮に全身に纏わりつき、思わず眉間に深いしわが寄る。両腕に掛かるビニール袋も、明らかに今日の晩御飯にはなり得ない食材やら日用品で膨れ上がっており、同年代の同性と比較して華奢な腕を容赦なく締め付けていた。

「くうっ、ビニール袋が地味に腕に食い込んで痛い……！そして何より蒸し暑すぎる……!! 幼気な息子の輝かしい長期休暇の初日にこんな仕打ちを強いるとは、ちゃっかりの皮を被った悪魔め……！この精神的苦痛には、お駄賃という名の慰謝料で存分に報いさせてくれるわ……!!」

照り付ける日差しの所為で顔から滴り落ちる汗に釣られるようにして、取り留めのない愚痴もつらつらと零れ落ちる。勝吾あたりが聞いていたら、「お前も大概ちゃっかりしてんじゃねーか」と突っ込みが入ること請け合いだっただろう。平日の午前中ということもあってか周囲に人の姿はなく、思わず音量も語気もヒートアップしていく。

「あー、もうっ！こんなことなら勝吾と一緒に来てもらえば良かった！あの無駄に有り余る筋肉と体力は、まさに今この瞬間の為だけにあるというのに……!! いや待てよ、もはやこれは職務怠慢と非難されて然るべきなのでは……？ そうだ、今度あいつに会ったらアイスを奢らせよう……!!」

無遠慮に降り注ぐ日差しは先ほどまでよりも確実に殺意を増しており、自宅に帰り着くには避けて通ることのできない長い急勾配も終盤に差し掛かった辺りで、いよいよメグムの疲労と独り言も最高潮を迎える。

実に身勝手極まりない結論に達し、荷物の重さで鈍く痺れる拳を固く握り締めながら理不尽に熱い決意を固めた瞬間——何かにひびが入るような不快で、不穏な轟音が、周囲一帯の空気を激しく震わせた。

「——っ!! ……な、なにっ？ 何の音っ!？」

世界が、割れた——。

荒唐無稽としか思えないような感覚が瞬時に脳裏を駆け巡り、メグムの肌を激しく粟立たせる。

先程までとはまったく異なる種類の嫌な汗が頬を伝うのを感じながら、瞬きはおろか呼吸も忘れたまま慎重に周囲を見回すが、特に異常は見当たらない。どころか、数秒前の異変が悪い夢だったかのように、辺りは実に静かなものだった。

「な、何だったんだ、いったい……？ 地震、だったのかな……？」

しばらくその場に立ち竦んだまま周囲の警戒を続けていたが、やがて何事もないことを確信すると、深い安堵のため息とともに脱力した——瞬間、メグムは途轍もない“異常”を見落としていたことに気が付いた。

——あまりにも、静か過ぎる。

耳を劈くようにそこかしこで輪唱していた蝉の鳴き声。数分前に通り過ぎたばかり小学校の校庭ではしゃぐ子どもたちの歓声。路地を四つ挟んだ先にある遠くのバス通りを行き交う車のエンジン音に、生ぬるく湿った風が鼓膜を揺らす微かな音。

ほんの少し前までメグムが気にも止めていなかった、しかし確かにメグムの周囲に溢れていた喧噪が、跡形もなく消え去っていた。

「……え、あれ？ 何で、何これ……!？」

度の過ぎた静寂がもたらす耳鳴りと、いまにも破裂しそうなほどに早鐘を打つ心臓の音だけがメグムの世界を満たす。得体の知れない恐怖と焦燥に、自分の息が荒くなり始めたのを感じた瞬間、メグムの耳が誰かの“声”を捉えた。

『————の理に——者よ。我が声————、我が————よ』

直感的にそれを「声」だと感じ取ったが、周波数の合っていないラジオ放送にも似た酷い雑音混じりの音をそう認識できたことは、ほとんど奇跡に近かった。

明らかに尋常ではない状況に、更に追い打ちをかけるような異常現象にますます身を強ばらせながら、じっと息を潜める。

そうして数十秒ほど——実際にはもっと短い時間だったかもしれないが——が経過した時、鼓膜が再び先程と同じ音を捉えた。

『——なる——の理に————者よ。我が声——耳——、我が想い——よ』

先ほどよりも幾分か雑音が薄れ、今度ははっきりと「人の声」であることを確信する。しかしながら、ホラー映画やサスペンスドラマなどでは“お約束”の「電波状態の悪い無線通信」よろしく途切れ途切れにしか聞こえず、声の主が何を言っているのかまでは分からない。

(誰かが、何かを呼び掛ける……?)

沈痛な無音が支配する世界において、その「声」は、耳を塞いで無視するにはあまりにも蠱惑的に響いた。自らの置かれた常軌を逸した状況をも思わず忘れ、断続的に繰り返される呼び掛けらしき声に食い入るように耳を傾け続ける。

どうにかして内容を聞き取ろうと全神経を集中させるのだが、雑音が薄れたかと思えば急に声が遠くなったり、再び声が近付いたかと思えば耐え難く不快な鳴音に襲われたりと、まるで寄せては返す波のように翻弄されるばかりで、一向に聞き取ることができないまま、時間だけが過ぎていく。

そうして、やがてメグムの中に苛立ちとも焦りともつかない感情が膨れ上がり始めた頃、呆気なさを感じる間もないほどに突然、「声」の“焦点”が合わされた。

『——異なる世界の理にまつろう者よ。我が声に耳を傾け、我が想いに応えよ』

「——っ!？」

意表を突かれるようにして、「完全に意味の認識できる音」がいきなり耳に飛び込んできたことに、反射的に身体が硬直してしまう。だが、それ以上にメグムの身体を強ばらせたのは、その内容の異質さであり、その声色に滲んだ狂気だった。

言葉としては理解できるのに、意味がまったく理解できない——。へばりつくような不気味さが背中を逆撫でた瞬間、必死に押し留めていた恐怖心が決壊し、半ば恐慌状態に陥ったメグムは、嘔み付くようにして虚空に向かってがなり立てる。

「——っだ、誰!?　ねえ、さっきからいったい誰なの!?　どこにいるの!？」

恐怖のせいか興奮のせいか、浅く乱れる息とともに固唾を懸命に呑み込みながら、誰に投げ掛けたかも定かではない問い掛けへの“返事”を待つ。

だが、次の瞬間、メグムが耳にしたのは、望んでいた答えでも救いとなる助言でもなく、おぞましい歓喜に満ちた底冷えのするような静かな叫びだった。

『——見つけた……!』

瞬間、メグムの足下が、真っ黒なペンキか何かをぶちまけられたかのように暗く染め上がる。咄嗟の出来事に声を上げる間もなく、地面に広がった“影”から同じ色を纏った無数の手がメグムに襲い掛かると、強烈な力で雁字搦めにしたまま“影”の中へと引きずり込み始めた。

「うわああ!!　な、なにこれっ!?　い、嫌だ、やめて!!」

出来の悪いホラー映画のような非現実的な展開に、現実が為す術もなく浸食されていく恐怖が、いよいよメグムからなけなしの理性を完全に奪い去ってしまう。

気が触れたかのように言葉とも音ともつかない叫びをわめき散らしながら、身体に纏わり付く“手”を振りほどこうと死に物狂いで暴れるが、まるで固く分厚いゴムできつく縛られたかのような拘束を、ごく僅かばかり緩めることさえ叶わなかった。

「誰か——!　お願い、誰かっ!　誰か、助けてえっ!!」